

映像とことば 現代社会の隘路を歩く 「1000の言葉よりも」を観て An Image and Words: the Bottleneck of Modern Society - A Review of “more than 1000 words” -

椎野 信雄*

Nobuo SHIINO

0.

2008年6月14日（土）より東京都写真美術館ホール（恵比寿ガーデンプレイス内）で、「写真美術館で観る映画シリーズvol.40」としてロードショー公開されたドキュメンタリー映画の中で紹介された映像（写真）を素材に、映像とことばとメディアの関連を考察してみたいと思う。8月10日（日）まで上映されていたこのドキュメンタリー映画は、ソロ・アビタル（Solo Avital）監督・撮影・編集・音楽の『1000の言葉よりも—報道写真家ジブ・コーレン』（...MORE THAN 1000 WORDS）（2006／イスラエル／78分）（配給、宣伝：アップリンク）である。（公式サイト：<http://www.uplink.co.jp/1000words/>）そして紹介された映像（写真）とは、映画の日本語タイトルにもあるようにジブ・コーレンの撮った報道写真である。

1. ある一枚の写真

まずは、何の事前情報もなく、次の写真を見てもらいたい。そこにはなにが映っているのだろうか。何を写しているのだろうか。何が見えるのだろうか。私達は、この一枚の写真をどのように見ているのだろうか。なにが見えましたかを、1. photographic imageと名付けておこう。

1. photographic image（公式サイトより）



* 文教大学国際学部教授

この写真には、注意してよく見ると写真の右下に©Ziv Koren（著作権／著作権 ジブ・コーレン）というキャプションが付いている。つまりこの写真は、著作権の付与された写真なのである。ジブ・コーレンという作者の写真である。これを、2. copyrighted photographと名付けておこう。

しかしジブ・コーレンという写真家の名を知らなければ、この写真は、著作権のある写真以上の意味を持たない。ジブ・コーレンという名前を知っていると、単に写真映像1. photographic image以上の意味が付与されることになる。これを、3. Ziv Koren's photoと名付けておこう。

さらに、あらかじめジブ・コーレンという作者の名前を知らなくとも、ジブ・コーレンという写真家の紹介文があれば、それを読んだ後に、この写真を見る者には1. photographic image以上の意味が出てくる。この映画の宣言チラシは、この手法を問っている。つまり、以下のような紹介文が映画チラシやパンフレットに載っている。

「ZIV KOREN【ジブ・コーレン】1992年よりイスラエルの軍隊でカメラマンとしてのキャリアをスタート後にイェディオット・アハロノット新聞で編集委員会に加わり写真家兼フォトエディターを努める 1994年から2002年までフランスのフォトエージェンシー「シグマ」「ガンマ」に所属。2003年からは「ボラリス・イメージズ」に所属。1994年に撮影された、爆破されたイスラエルのバスの写真が、2000年に「ワールド・プレス・フォト・オーガニゼーション」の“過去45年の中で最も重要な写真200”の中に選ばれた。」^(注1)

私達は紹介文を読んでこの写真が「1994年に撮影された、爆破されたイスラエルのバスの写真」であることを理解する。さらに、この写真映像が、「2000年にワールド・プレス・フォト・オーガニゼーション^(注2)の“過去45年の中で最も重要な写真200”の中に選ばれた」ものであることも理解する。

「爆破されたイスラエルのバスの写真」という情報を得て、再度、この写真1. photographic imageを見てみよう。何が見えるのだろうか。1. photographic imageは、「爆破されたイスラエルのバスの写真」になるのだ。これを4. The photograph of an exploded Israeli busと名付けておこう。

だが、ほんとうにそうなのだろうか。1. photographic imageは、4. The photograph of an exploded Israeli busと同じ写真なのだろうか。例えば「爆破されたバス」として1. photographic imageを見ることはできるのだろうか。良く見れば「爆破されたバス」ではなく「破壊されたバス」としては見る事ができるだろう、と思われる。

しかし、この写真に映っているのが「バス」だ、とすぐに理解できるのは、ごく少数の人であろう。私達の「バス」のイメージを、そこに発見することが困難だからである。写真の右上に映っている物体を、バスの後部だと認知できる人は比較的多いかもしれない。普段、街で見かける「バス」の後ろが映っていると理解できるのである。しかし、まん中に映っているのは、そうした私達の通常のイメージの「バス」とはほど遠いものだ。そこには見慣れた「バス」はないのである。ではこれは何なのか。「バス」の認知以前に、なにか「破壊」(めちゃめちゃ、めちゃくちゃ)が映っているのだ。だが、なにか「破壊」されたかは、定かではない。

またこの写真は「自爆攻撃により破壊された一台のイスラエルのバス—爆発の衝撃と威力を物語り、報道写真家ジブ・コーレンの名を有名にした一枚の写真」と説明されている。だが、「自爆攻撃」や「イスラエルの」という情報は、1. photographic imageにあるのだろうか。1. photographic imageに「イスラエルの」バスという意味は見て取れるのだろうか。つまり1. photographic imageと、4. The photograph of an exploded Israeli busは、同じ写真ではないようなのである。しかし、こうした説明によって、私達は1. photographic imageを「爆破されたイスラエルのバスの写真」と見なしてしてしまうのではないだろうか。だが、写真を見るとは、4. The photograph of an exploded Israeli bus

として見ることなのだろうかという疑問が生じるのだ。

2. 報道写真の現状

私達は、このような紹介文を介して、この写真 1. photographic image が、プレス・フォト（報道写真）（あるいは印刷／新聞／雑誌／出版／報道機関（新聞社・出版社・通信社／放送局）／ジャーナリズムの写真）であることを理解する。では 1. photographic image の写真を、「報道写真」にするものは何だろう。そもそも「報道写真」とは何か。「写真」と「報道写真」は、何が違うのだろうか。

写真は、カメラで写したフィルムを現像した印画である。（近年はデジカメもあるが。）こうした写真を報道写真にするためには、メディアを通して「報道」過程に載せるための「表現」が必要である。報道写真とは、第一に報道表現の写真である。報道写真とは、とりもなおさず表現する写真のことである。つまり、報道写真とは、報道を目的として表現された写真のことなのだ。写した時から報道表現を目的とした写真もあるだろうし、予め写された写真が、報道表現を目的として用いられる写真もあるだろう。

写真が報道写真になるためには、何らかの形で、報道メディアを通さなければならないのだ。では世界にはどのような報道メディアが存在しているのだろうか。

コーレンの紹介文の中にあった「ワールド・プレス・フォト・オーガニゼーション」（世界報道写真財団）が開催している世界報道写真コンテストには、2008年度に125ヶ国からの5019人の報道写真家が応募したという。このコンテストは、「世界報道写真大賞」（the World Press Photo of the Year）の受賞者を選定すると同時に、次のようなテーマ・カテゴリーの受賞者（3位まで）を決めている。スポットニュース、一般ニュース、ニュースの中の人びと、スポーツアクション、スポーツフィーチャー、現代の問題、日常生活、ポートレート（肖像写真）、アート&エンタテインメント、自然のといった部門である。そして今年も、23ヶ国の59人の写真が受賞した。^(注3)

それらの写真の載ったメディアは、次のものであった。Vanity Fair (UK)、Time magazine, Internazionale (Italy), The Associated Press, Washington Post, Getty Images, The New York Times (Magazine), Zimbabwe Independent, European Pressphoto Agency, Agence France-Presse (AFP通信), Agence Vu, VII Network / Alexia Foundation, Stern, Newsweek, Rezo.ch, Panos Pictures, Guardian Weekend magazine, MIT, Aurora photos, Ria Novosti, National Geographic Magazine, New York Magazine, Agenzia Contrasto, D La Repubblica delle Donne, Tianjin Daily, Anzenberger Agency, Magnum photos, CNN, Nangfang Dushi Daily / Southern Metropolis Daily, National Geographic Images, Berlingske Tidende, Australian Financial Review Magazine, Field & Stream magazine, Yours Gallery / Focus Fotoagentur, Sydney Morning Herald, Record, Bul X Vision Photography Agency, Spomedis, Xinhua News Agency, The Salt Lake Tribune である。これらが現代の代表的な報道メディアと言えるのかもしれない。

報道写真のメディア史の始まりは20世紀であり、新聞メディアの発達に伴って登場したNew York Timesなどがその嚆矢であろう。（19世紀末にはフォト・ドキュメンタリーの創始もあったが。）小型カメラ「ライカ」の出現（1925年）などの写真技術の発達を背景として、時代の寵児のような報道写真家たちが活躍した報道写真の黄金期（1920～30年代）に登場したのだ、LIFEである。1936年に創刊された商業グラフ誌（写真によってニュースを伝える週刊誌、発行部数9000部、タイム・ライフ社）で、LIFEによって報道写真は「商品」となり、フォト・ジャーナリズムの時代が到来したのだ。

また1929年以降の大恐慌時代のアメリカ合衆国では、政府の農業保障局FSA（Farm Security

Administration) プロジェクト (1935-1944) として、南部の農村の状況を記録するドキュメンタリー写真が数多くの (個人名のある) 「写真家」によって撮られていた。写真家の個人としての視点のある「報道写真」であった。^(注4) 当時のヨーロッパでは、反体制側あるいは体制側のプロパガンダとして写真が政治的に用いられていた。そして第二次世界大戦中に、戦争写真が登場した。19世紀の「戦争」(クリミア戦争や南北戦争など) が報道写真の始まりだとする通説どおり、数多くの戦争写真がLIFEなどに載ることになった。だがこうした戦争写真には「個人の視線」が欠如していた。写真家個人の名前は重視されていなかったのである。

第二次世界大戦後に、ヨーロッパの写真家はアメリカ合衆国に移り、写真の中心地はアメリカ合衆国になっていった。戦後も、冷戦構造の戦争や紛争に関する報道写真やスクープが盛んに発信されたが、そこでも報道写真家の個人の視線は欠如していた。自分自身の主張や表現のための作品として報道写真が用いられることはほとんど無かったのだ。(ユージン・スミスなどのドキュメンタリー写真はその例外と言っていいだろう。) テレビの普及に押されて、1972年にLIFEが(通算1862号で)休刊となり^(注5)、報道写真の凋落とみなされている。ではニュースメディアの終焉と共に、報道写真家も死んだのだろうか。

1980年代から、写真家は写真をストック(写真) エージェンシーに提供するようになっていった。現在は、1990年代のエージェンシー統合の結果として、Getty Images (ゲッティイメージズ) と Corbis (コービス) が二大エージェンシーとなっている。ゲッティイメージズは、1995年にロンドンに設立され、1999年にシアトルに本部を移転し、50ヶ国にオフィスを構える世界最大のイメージ・プロバイダーである。^(注6) もう一つのコービスは、1989年にマイクロソフト社長のビル・ゲイツが創立したデジタルイメージコンテンツ提供会社である。またJupitermedia Corporationが第三の勢力と言われている。2000年代になり、インターネット上に「マイクロストック写真」が登場し、成長産業となっている。インターネットのデジタル時代においては、巨大メディア企業が、写真映像情報分野における覇権を握っているのだ。こうした状況の中で、独立系の写真エージェンシーの存在は、フォトジャーナリスト(報道写真家)にとって風前のともしび同然の状態なのである。さらに報道写真家は、自分の写真の著作権も主張できない法的状況が生まれつつある。写真家が報道表現の目的をもった写真をとっても、インターネット時代には、デジタル配信のネットワークに載らないと、日の目をみない可能性が大きいからである。

3. 写真と著作者

写真にとって著作権はどんな意味を持っているだろうか。著作権とは、著作物と著作者の間の権利関係を指し示している。著作物は、著作者を同時に示す必要はないが、著作者と同時に指し示されることもよくある。1. photographic image と、2. copyrighted photograph は、写真として何が違うのだろうか。あるいは同じなのだろうか。

1. photographic image というものに、限り無く「写真」の意味を表現したのは、例えばフランスの写真家アンリ・カルティエ＝ブレッソン (1908-2004) であろう。彼は「<決定的瞬間>は出来事を完全な構図で撮る」と主張し、長方形の中で完璧に構成されたものを写真と見なしたのだ。そして「私にとって写真とは、1秒の何分の1かの時間で、出来事の意味を認識し、それと同時にその出来事を表現するのに最も適した構図を見つけることである」と語った。^(注7) それでは彼の死と共に、20世紀の報道写真は終焉を迎えたのだろうか。

20世紀の後半以降の報道写真は、1. photographic image では意味を形成しなくなったのではない

だろうか。しかし同時にフォトジャーナリズムの報道写真は、2. copyrighted photographであることも拒否されてきた。巨大メディアにおける報道写真は、ひとえに客観的記録としての「真実の描写」、証拠写真としての没主観的「再現」の機能が期待されたのである。

しかし写真が単に証拠写真になってしまった時、報道写真の表現力は極端に矮小化されてしまったのでないだろうか。そこでは報道写真は、客観の再現だけとなり、写真家自身の事実の表現であることがまったく無視されてしまうのである。報道写真は、証拠写真であると同時に、写真家の世界の経験の表現でもあり、出来事に関する解釈の表現でもあるはずなのだ。

写真は、客観を再現した映像ではなく、長方形とそれを取り巻く環境や状況を解釈した表現である。長方形と環境の間に存在しているのが、写真家なのである。したがって、写真とは客観の長方形で完結するものではなく、写真家＝著作者の痕跡も含めてはじめて存在するものなのだ。

巨大メディアにおける報道写真の「似而非」客観主義の映像に馴れてしまった私達は、著作者の名前のある写真には逆に「主観主義」のような錯覚を付与してしまう。「主観主義」のレッテルを貼ることによって、「似而非」客観主義の立場に立っているという勘違いの下、現代の私達は報道写真の表現力を最低限のところに還元してしまっているように思われる。

報道写真は、世界の経験の仕方や、世界の出来事の解釈を表現でき、絶えず世界を再解釈する契機になる可能性を孕んでいるものではないのか。その可能性を示す印が、現代では写真家の著作名なのではないだろうか。しかし、現代の巨大メディアにおける報道写真には、ほとんど著作権のある写真（2. copyrighted photograph）が見られない。巨大メディアには、写真家の著作権のない報道写真が氾濫しているのだ。

4. 写真（3. Ziv Koren's photo）を見る

ジブ・コーレンとはどのような報道写真家なのか。ドキュメンタリー映画『1000の言葉よりも』の公開に先駆けて、「<1000の言葉よりも>ジブ・コーレン報道写真展」が、6月10日（火）～6月21日（土）に横浜・みなとみらいのBankART 1929 Yokohama <3 F 1929 スペース>（横浜市中区本町6-50-1）で開催された。この写真展では1. photographic imageを中心に50点の写真が展示され、6月13日（金）には「ジブ・コーレンによる報道写真ワークショップ」（40名）も行われた。映画の公開に伴って、紹介されたジブ・コーレンの人物像を見てみよう。

「イスラエル人としてパレスチナ問題を撮り続け、危険を顧みず現実を伝えようとする報道写真家ジブ・コーレン」

「イスラエル人であるジブ・コーレンがパレスチナの紛争を撮影するのは非常に危険である。」

「イスラエルとパレスチナに関する彼の写真はこれまでに世界中の新聞のトップを飾ってきた。」

「イスラエル人としてパレスチナ紛争の取材を続ける報道写真家ジブ・コーレン」

「テルアビブ在住の一人の写真家ジブ・コーレン」

「タイム誌^(注8)の表紙を飾り、後に世界中のコンクールで賞を総なめにしたこの写真は、イスラエルの新聞にも掲載された。死んだ自国民の写真を自国の新聞に掲載したのは、イスラエル報道史でも際立った出来事だった。監督ソロ・アビタルは、家族との会話や友人のインタビューを通して見えるコーレンのプライベートな表情、そして時には、暴動の最中、危険な西岸地区で戦犯と呼ばれる人物とのミーティングの様子をとらえる。惨劇を目の前にしてシャッターを切ること、そのトラウマ。幸せな家庭を持ちながらも戦場へと向かうコーレンは、ねじれた現実を鮮明に写し出す。」

こうしたジブ・コーレンは、自身の写真(1. photographic image)について以下のように語っている。

『今でも彼は、自爆攻撃のバスを撮影した時の衝撃をこう語る。「いまだ鮮明に記憶している。どこに立って何を見たか、今でも思い出せる。現場から立ち去っても、まばたきするたびに死体が見えた』

『彼の写真は、どんな言葉よりも雄弁に真実を語る。「目の前で人が死んだ。その時感じたものを写真を通して伝えたい。それが、私にとっては強迫観念なんだ』

またジブ・コーレンは、インタビューに答えて次のように述べている。

「撮影する時に心がけるのは、個人の意見や思想が写真に影響を及ぼさないようにする事です。可能な限り、個人的な目的に左右されることのないよう、事実があるがままに写したいと考えています。」

「私は何か世の中に変化をもたらすような出来事を伝えたいと考えています。・・・しかし・・・私に関心を持つ出来事は多くの場合、世間が排除してしまおうと考えるような、非大衆的な物語なのかも知れません。」

「人が死ぬ様子を“ライブ”で目の当たりにすることは最も衝撃的な事です。しかも理由もなく人間の生命が無駄に奪われるという様子をです。」

5. 写真(1. photographic image)を見る

最後にもう一度1. photographic imageを見てみよう。写真を見るときは、何を見ることなのだろうか。客観の1. photographic imageを見ることなのだろうか。巨大メディアではそうなのかもしれない。だがそうなのだろうか。では、1. photographic imageを4. The photograph of an exploded Israeli busとして見ることなのだろうか。報道写真では多くの場合そうなのかもしれない。しかし4. The photograph of an exploded Israeli busは、1. photographic imageを見ているのだろうか。そうではないようである。では、1. photographic imageを3. Ziv Koren's photoとしてみることなのだろうか。上記4節を理解すれば、私達は1. photographic imageを見たことになるのだろうか。この文章で私はそう言っているように思われるだろう。だが、そうではないのである。写真を見るときは、特に報道写真を見るときは、2. copyrighted photographを見ることではないのだろうか。それは、客観の、1. photographic imageを見ることでも、4. The photograph of an exploded Israeli busを見ることでも、3. Ziv Koren's photoを見ることでもないのである。そこには何が写っているのか。3. Ziv Koren's photoに限りなく近く表現するならば、そこには「世の中に変化をもたらすような出来事」が写っているのである。しかしそれは、4. The photograph of an exploded Israeli busのことを言っているのではないのだ。それは2. copyrighted photographには写ってないのである。あなたは2. copyrighted photographに何が見えますか。それが写真を見ることなのではないか。私達は、写真を見ているのだろうか。

注

1 「シグマ」「ガンマ」(や「シパ」)は、1970年代に写真ジャーナリズムの世界的中心地パリでフリーの写真家たちが設立した独立系エージェンシーである。当時一世を風靡し、大企業となったが、多くのエージェンシーは巨大メディアグループ企業に買収されてしまった。ポラリス・イメージズ(POLARIS IMAGES)は、2002年にニューヨークに設立された(独立系の)写真エージェンシーである。

ジブ・コーレンwebsite (<http://www.zivkoren.com/>)

2 ワールド・プレス・フォト・オーガニゼーション (World Press Photo Organization) (世界報道写真財団) は、オランダ・アムステルダムにオフィスのある独立の、非営利の組織で、1955年に設立された。独自の執行委員会と経営管理運営委員会に統制を受け、約25名の定職の職員を雇っている。このオフィスは、世界中のプロの写真家の接点のネットワークのためのハブ (中軸) として機能している。なによりもまず、この組織は、世界最大で最も名声のある年一回の報道写真のコンテストの開催で知られている。入賞写真の写真展がアムステルダムで公開された後、入賞写真は、世界中の約45ヶ国の80の都市で2百万人以上の人が訪れる巡回展示会 (exhibitions) で見られる。受賞作品の全てを紹介する『年報』yearbookは、毎年、六か国語で出版されている。この組織は、写真ジャーナリズムにおける高度のプロ水準を奨励し、制限のない知識移転 (情報交換) を促進することに関心があり、国際的基準でのプロの報道写真を支援する目標がある。キャノンとTNTが、法人スポンサーとなっている。Dutch Postcode Lottery (オランダ郵便番号宝くじ) からも支援を得ている。

Website (<http://www.worldpressphoto.com>)

- 3 日本では「世界報道写真展～2008～ (WORLD PRESS PHOTO 08)」が東京都写真美術館 (地下1階展示室) で6月14日-8月10日に開催された。(公式HP: <http://www.syabi.com/>) この後、大阪会場: ハービスHALL ハービスOSAKA地下2階 (大阪・梅田) 8月12日-21日、滋賀会場: 立命館大学びわこ・くさつキャンパス10月1日-19日、京都会場: 立命館大学国際平和ミュージアム10月21日-11月16日、大分会場: 立命館アジア太平洋大学11月19日-30日) を巡回する。
- 4 これらの写真 (10万枚以上) は現在、アメリカ国会図書館 (Library of Congress) にコレクションとして保存されている。
- 5 最盛期1970年の発行部数は850万部であった。1978年に月刊誌として復刊され、1986年に創刊50周年を迎えたが、経営悪化のため2000年に再度休刊となった。2004年に新聞折り込みの無料週刊誌として復活したが (1300万部)、2007年に休刊した。
- 6 2008年に投資会社ヘルマン・アンド・フリードマンに買収された、と報道された。
- 7 Bresson 1952. ブレソンにとって<決定的瞬間>とは<心の内部の世界>と<外側に広がる世界>のバランスのことである。
- 8 タイム誌 (TIME) は、世界で初めてのニュース雑誌として1923年にニューヨークで創刊されたアメリカの (英文) 週刊誌である。政治・経済・文化・先端科学・芸能などあらゆる情報を網羅する。世界有数の発行部数 (540万部) の表紙を飾ることは、名誉なことであり、格付けの目安となっている。本国版、ヨーロッパ版、アジア版、カナダ版、南太平洋版が発行されている。

参考文献

- 飯沢耕太郎『写真とことば 写真家二十五人、かく語りき』集英社新書2003
 飯沢耕太郎『写真について話そう』角川学芸出版2004
 飯沢耕太郎『写真を愉しむ』岩波新書2007
 今橋映子『フォト・リテラシー 報道写真と読む倫理』中公新書2008
 クリスチャン・コージル (北浦春香訳) 「フォトジャーナリズムの未来のために」『ル・モンド・ディプロマティーク』2002-9 <http://www.diplo.jp/articles02/0209-5.html>
 小林美香『写真を“読む”視点』青弓社 (写真叢書) 2005
 徳山善雄『フォト・ジャーナリズム いま写真に何ができるか』平凡社新書2001

長倉洋海『フォト・ジャーナリズムの眼』岩波新書1992

名取洋之助『写真の読みかた』岩波新書1963

日本ビジュアルジャーナリスト協会編『フォトジャーナリズム13人の眼』集英社新書2005

ソロ・アビタル監督DVD『1000の言葉より報道写真家アジブ・コーレン』アップリンク2008

ハインツ・ビュートラー監督DVD『アンリ・カルティエ＝ブレッソン 瞬間の記憶』ジェネオン・エンタテインメント2007.

(映画パンフレット)『1000の言葉よりも 報道写真家ジブ・コーレン』アップリンク2008 (ISBN-978-4-90072-818-9 c0074, \600)

Henri Cartier-Bresson The decisive moment. NY Simon & Schuster, 1952 (Images a la sauvette.)